

吉川元偉 前国連大使 特別対談第2回【なぜ今、外国語を学ぶのか】

2017.09.21



前国連大使の吉川元偉（よしかわ・もとひで）先生と、神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所の久保谷富美男先生との対談の様態をお届けする2回目。今回はグローバル化の渦中にある今、外国語を学ぶ意味について伺いました。

〈久保谷先生〉

本学にも、将来外交などの分野でグローバルに活躍したいと考えている学生が数多くいます。外交官に求められる資質とは何でしょうか？



〈吉川先生〉

まず政治、経済、歴史、文化の知識が必要ですが、それら表現するための言語の能力はとても大切です。毎年秋に行われる国連総会では、大統領や首相など各国の代表の多くが自国語で話していることに皆さんはお気づきでしょうか。日本の安倍総理大臣も英語で演説されたこともありますが、多くは日本語で演説されています。その理由は国連での代表演説が、テレビなどのメディアを通じて自国民に向けて発したメッセージを意図としたものだからです。そして会場にいるその他参加国の代表は、通訳を通じて各国の演説を聞いているわけです。

しかし、その舞台裏となる国同士の交渉の場では、通訳を付けることは少ないです。そこでは英語とフランス語などを自由に話せることが必須となります。例えば、国連での選挙の一票を取るためにいろいろな国の代表を訪ねて支持を働きかけるような場面では、もし相手がスペイン語圏の国であればスペイン語で話しかけた方が圧倒的に共感を得ることでしょう。つまり、多言語運用のスキルが外交の大きなアドバンテージになるといっても過言ではありません。世界の共通語である英語が出来るのは大事だけれども、さらにもう一つ、二つと複数の言語ができるのはもっと効果的なのです。

〈久保谷先生〉

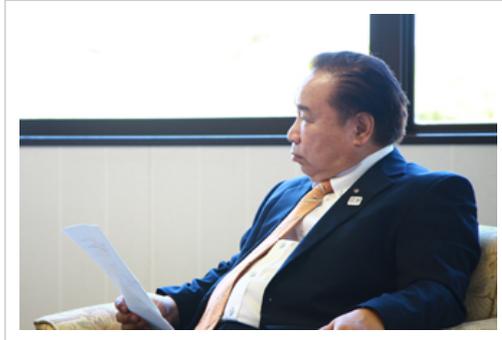
多言語運用スキルのほかに、特に外交官だからこそ求められるコミュニケーション上の特殊能力はありますか？

〈吉川先生〉

外交官として仕事をする上では、相手に誤解を与えないことが第一に大切です。例えば、諸外国との交渉時に利益が一致せず「NO」と言いたいだけでも最初から「NO」と言ってしまうと相手は席を立ってしまいます。しかし「YES」ではないことはしっかりと伝えなければならない。このような時には相手に誤解を生まない表現ができる力、誤解が起きてしまったとしても直ちに修正するコミュニケーション能力が求められるのです。そうでないと大切な国同士の信頼関係が崩れる大きな要因となってしまいます。一度壊れた関係性の修復には倍以上の時間と労力がかかります。そうなる前に、たとえ日本とは考え方が異なるとしても、信頼関係だけはしっかりと維持していかなければならない。その第一歩はまず相手国に誤った理解を与えないことに尽きます。これが嫌だと思っても安易に喧嘩別れなどせず、違う考えの相手ともすぐに関係を切らないのが重要です。

〈久保谷先生〉

やはり外交の交渉場面では、さまざまな引き出しを常にもっていることが問題解決のカギとなるのでしょうか。では、言語運用能力やコミュニケーション能力のほかに欠かせないスキルはあるのでしょうか？



〈吉川先生〉

立場上、たびたび国際人の要素は何かと尋ねられますが、最も大切なことは、やはり常識や教養です。かつて国際連盟事務次長も務めた新渡戸稲造は「インターナショナルは、ナショナルから始まるものだ」と述べています。つまりそれは、ナショナル(自国)がないインターナショナルはないということ。日本人として立派な教養を身につけていて、更に外国文化を知れば自然と立派な国際人になるという意味なのです。皆さんも異文化はもちろん、日本の文化への知識・教養をもった上で国際的な舞台で活躍されることを期待しています。



■ 吉川元偉 (よしかわもとひで) 先生

1951年、奈良県生まれ。国際基督教大学教養学部社会学科を卒業後、1974年に外務省に入省。国際連合日本政府代表部特命全権大使・常駐代表、在スペイン日本国大使館特命全権大使、初代アフガニスタン・パキスタン支援担当大使、経済協力開発機構(OECD)日本政府代表部特命全権大使等を歴任。英、仏、西3カ国語を話す。

